

『ジュニア・パノ』新人類』

都留文科大学教授 後藤道夫

私は東京の小平市に住み、大学に通っています。そのため、たいい週に一回、ゼミを六時すぎまでやる日は大学会館に泊まっており、それを利用して学生たちと一杯やるのが少なくありません。

自分の学生時代を考えると、大学の教師と酒を飲んでおしゃべりをした、などということは恐らく一回もなかったような気がします。大きな大学や都会の大学ではまず無理な付き合い方ですから、教師と学生のこうした密接なコミュニケーションは文大の利点の一つだと言ってよいでしょう。

ところで、こうした付き合いをしていてよく感じるのですが、最近の学生諸君は突っ込んだ議論や相手の「内側」に入り込んで行く議論が嫌いで、「軽く明るい」話題を選ぶことが多いようです。その結果、マジメな話をできる人間関係はなかなか育たず、何年も一緒にいながら、相手の本当の興味や、考え方、悩みのようなものを知らずに付き合い合っている、あるいはあえて知らないようにして付き合い合っている、という風に思える場合が少なくありません。私はまだ四〇歳そこそこですが、自分の若い頃と比べてその違いにとまどうこともしばしばです。それでも一緒に付き合い合って一年もすると、けっこう自分たち自身で突っ込んだ話ができるようになる場合が多いのですが。

現代の若い人たちのものの感じ方、考え方という具合に話をひろげると、企業の幹部の人たちが自分の若い部下たちに感じていることにも、これと共通する点がある

ようです。何事にも半身の姿勢で、情報の処理は上手だけれども、自分で責任をもって自分のものの感じ方・考え方をぶつけた仕事の仕方をしない、マニュアルを与えなければ仕事をしようとしてせず、方向性とか理念とかについては判断をさける、職場の人間関係をできるだけ薄いものにしておきたがる、集団への自発的な帰属意識をもたない、等々。いわゆる「新人類」論議がさかんなゆえんでしょう。

なぜこうした特徴がでてくるのかということについての意見もいろいろですが、私自身は、それにはそれなりの理由がある、と思っています。

一つの理由は、中身の濃い人間関係を作ってそれを保っていかなくとも、毎日の生活や遊びが何とかなでしまふ、ということでしょう。少し前の時代だと、会社が終わってからもその続きの人間関係の中で遊び、先輩に教えられ、という育ち方をしたわけですが、それはそうしなければ、仕事も覚えられず、一人前の生活の知恵も身に付かなかったわけで、また一人一人の好みに合わせて遊びが選べるようになっていなくなった、ということだとも思います。今は仕事ひとつとっても、マニュアル化されていながら覚えるというよりは、会社での研修とか社内教育によって、基礎的な技能を身に付けるか、あるいは学校で資格をとってくる、という具合に、中身の濃い人間関係によらない部分が増えていくわけ

です。もう一つの理由は、以前と違っ

て、その集団のために誠意をつくせば何とか自分の生活や仕事を守ってくれる、そういう集団が見えにくくなった、ということだとも思います。昔は規模の大きな企業であれば、「終身雇用」と言われたように、仕事を何とかがんばり通した人間には寄るべき「大樹」であったわけですが、今は多くの企業が意識的にそうした雇用の仕方をやめ始めています。きびしい競争に勝つためには、必要な人間だけ残ってもらい、中高年のつぶしのきかない人材はどんどん「転身」を考えてもらう、というやり方が普通になってきているわけで、自分がいつ「必要」でない、といわれるかは保証の限りでなくなりつつあります。若い人たちが、集団に自発的な帰属意識を持たず、何事にも半身でいるというのは、いつそこから抜けることになっても困らない状態を確保しておくための、いわば生活の知恵のようなところがあるわけ

です。しかも、自分をずっと守ってくれる集団が見えにくい、というのは企業に限ったことではなく、学力競争があまりに激しくなった学校教育でも、近年の地域の人間関係にも多かれ少なかれあてはまることだとも思います。そこでなら安



心して自分をさらけだせるような良い意味で保守的な安定した人間関係が薄くなってきた場合、相手の「内側」に入り込むような詰めた議論が嫌われ、半身の「軽く明るい」会話が好まれるのは理解できないことではありません。言い方を変えれば、かなりさびしい人間観と社会観を前提にした、それなりに気まずくならず、ひとりぼっちにもならないようにするための生活の知恵ということでしょう。

というわけで、若い人たちのこうした「新人類」的なものの感じ方、人との付き合い方は理由のないことではないのですが、しかし同時にそこには相当に大きな問題があるように思われます。

一番大きな問題は、中身の薄い人間関係ばかり経験していると他人にある種の「鏡」として、自分をきたえるということがむずかしくなってしまう、という点でしょう。やはり人間にとって最大の経験は新たな人間との出会いであり、新たな人間関係だと思のですが、半身の姿勢のため、そうした経験あるいは出会いを、自分の人間観や自分にとつてのこれまでの常識の見直しの材料として話し合ひ、考え抜く、ということをしなないわけ

です。こうした状態だと自分はいったい何物で、本当は何を望み、どんな友達を欲しがっており、何を許せない人間なのか、というような点についての、いわば一人前の大人としての自覚がアイマイなままになり、精神的に成人しにくい、ということがおきてきます。感心して学ぼうと言うだけでなく、反抗し、乗り越えようとするという点でもよいのですが、どちらの場合にしてもそうした対象が鮮明になってこない、と言ひ換えても良いでしょう。企業や学校だけでなく、家族もそうした状況を提供する場ではなくなっているよう

です。たしかに、一人前になるまでの時間が長くなる、というのは文明国に共通する傾向ですが、たとえその準備期であっても、自分は何物なのかという自覚は試行錯誤をくりかえしながら前に進むべきものだと思ひます。しかし、現在の日本の青年たちは、この点で率直にいうと大変みっともない青年たちであると私は感じています。もちろんこれは若い人たちの責任ではありませんが。

もう一つの問題は、詰めた議論を嫌い、自分のものの感じ方・思想を外に出さない、ということのために、知識や情報が考え方・価値観と結び付かず簡単に「処理」されてしまふ、ということ

です。ですからいふんと多くのことを知っているわりに、それが自分の精神を豊かにしてくれないと言ひます。かたがたの試験用の知識、あるいは理屈抜きの技術的知識に落してしまつて、自分のものの見方の見直しにつながっていか

ない。知識は知識で、感じ方と好き嫌いはこれと全く別物、というわけ

です。これも困ったことだと思ひます。書物で学習しても、なかなか身にならないのですから。

大学での教育といつても、こうした現代の状況にマッチしたものとならざるを得ないのだからと思ひます。書物で学ぶものと実地に見たり聞いたりすることを結び付けるとか、一緒に見てきたもの

のとらえ方について突っ込んだ議論をする、などの意識的な工夫が必要となるでしょうし、率直で突っ込んだ会話が、しかも仲良くできる人間関係ができるような援助をするということも必要でしょう。せいぜい一緒にしゃべりをするわけですから。

というわけで学生と一杯やるのも教育のうちという、へ理屈をつけ、女房のしぶい顔をクリヤーしております。